

旧大乘院庭園の調査

－第336次

1 はじめに

(財)日本ナショナルトラストによる保存修理事業にともなう調査として、奈良文化財研究所が、国指定名勝旧大乘院庭園の調査をはじめて7年目となる。今回の調査区は、西小池の北端が想定される場所(北区)と、東大池の南西に浮かぶ島(南区)である(図128)。

調査期間は、2001年10月1日から2002年2月6日。調査面積は、北区が約387㎡、南区が約120㎡、合計約507㎡である。

調査の目的 西小池は、江戸時代末頃に隆温大僧正が描かせたとする『大乘院四季真景図』(以下『真景図』)に描かれているが(図129)、現在では、その一部が入江状に残るのみである。また、南区は『真景図』に「天神シマ」として描かれている島である(図129)。西小池も天神シマも、15世紀初頭頃とされる絵図には描かれていない。今回の調査は、これらの形状を確認するとともに、その造成時期をさぐるものが所期の目的であった。

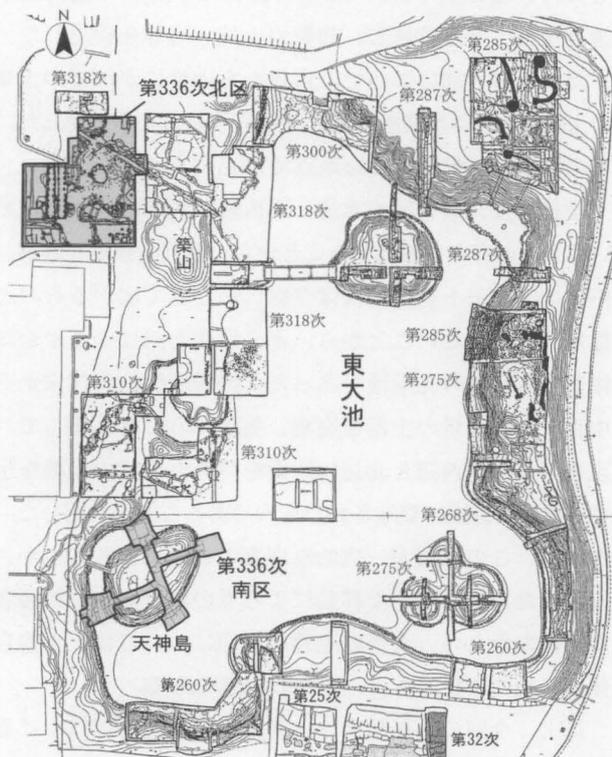


図128 第336次調査区位置図

調査の概要 北区では、江戸時代の西小池の形状を確認するとともに、造成時期や造成方法に関する重要な知見を得ることができた。また下層遺構の存在から、近世における改修があったことも明らかとなった。さらに池の西側では室町時代の遺構面の存在を確認し、部分的ではあるが、断割調査で奈良時代や平安時代にさかのぼる遺構も検出している。明治時代初頭、大乘院の廃院後しばらく、一部の建物は学舎として利用された。学舎は一時、元興寺極楽坊に移るが、明治16年には飛鳥小学校が大乘院の敷地内に建てられる。小学校に関連する遺物の出土状況から、西小池の埋没時期に関する情報を得ることができた。また、南区では天神島の造成が近世にくだる可能性が高いことを確認した。

なお、本報告では『真景図』に描かれた西小池の形状にもとづいて、最北に位置する部分を「北池」、それに南接する池を「中池」、ラシマより南を「南池」と呼び分けることにする(図130)。

2 検出遺構

北区

調査区全体の基本的な層序は、池の東西で異なる。東側では地山直上に11世紀頃の土師器をともなう遺物包含層があり、そのうえに淡黄色の整地土が厚く盛られている。この上面が近世の遺構面であり、それを覆う近代以降の盛土(新盛土)がある。それを掘り込むゴミ捨て穴や焼却施設など、近現代の遺構群が全面的に検出された。本調査区はかつて奈良ホテルの敷地内であったことから、これらの遺構は同ホテルに関わるものと考えられる。新盛土の上は、石炭ガラを積んで平らにした上にテニスコートが造成されていた。

池の西側では、地山の上に整地土があり、その上面は室町時代に火熱を受けた焼土面となる。焼土面の上には赤い土師器小片を多量に含む茶灰色の整地土が数度にわたって積み上げられている。

調査区内では、池(SG8321・SG8323)や防空壕(SX7858)といった大型の遺構が地山まで到達していたため、中世の整地層の多くが失われている。また、江戸時代の遺構面を保存する必要から下層遺構の検出は部分的なものにならざるを得ず、遺構の性格などに踏み込んだ詳細な検討は、今後の課題として残されている。

SK8308・SK8309・SK8310・SK8311 防空壕SX7858の掘形下で検出した奈良時代の土坑。検出面は地山上面である。埋土から出土した土器は、いずれも平城Ⅲの様相を呈する土師器、須恵器の各器種で、製塩土器も含む。元興寺域であったと推定されている本調査区で、当該時期の遺構が存在することが明確に確認された。

SX8312 防空壕SX7858掘形下で検出した柱穴列。南北方向の1間分を検出した。柱間は2.4m（8尺）で、西に続く可能性がある。掘形から遺物の出土はなく、詳細な時期は不明であるが、規模などから奈良時代の掘立柱建物の可能性もある。

SD8313 中池SG8323の西岸を50cm幅で部分的に断ち割ったところ、3時期にわたる溝を検出した。SD8313は最も新しい溝。防空壕SX7858掘形南壁断面においても確認しており、北西に向かう。詳しい時期は不明。

SD8314 SD8315より新しく、SD8313に先行する溝。SD8313同様、北西に向かう。詳しい時期は不明。

SD8315 最も古い溝。防空壕SX7858の掘形底面で奈良時代の土坑SK8308やSK8310、SK8311を掘込んで南北に走る。南側は中池SG8323の西岸にもぐる。埋土に11世紀頃の瓦器、土師器皿を含み、この時期の遺構であるならば、大乘院の前身である禅定院の時期のものとして注目される。

SX8316 調査区西北部において、江戸時代の面を下げたところで検出した焼土面。調査区南端のSB8320柱掘形の底面においても確認したことから、池の西側全面に広がると思われる。表面が硬化した部分もあり、火災の勢いの強さが推測される。焼土面の直上で瓦質の火鉢が出土した。この火鉢やSX8316より下で検出した土坑の土器から、『大乘院寺社雑事記』にみえる宝徳3年（1451）の徳政一揆による火災跡の可能性はある。

SK8317 焼土面SX8316に覆われた土坑。いわゆる赤土器とよばれる室町時代の土師器が多量に出土した。白土器の小片も若干含む。土坑の底付近から鎌倉時代の興福寺所用瓦が出土した。

SK8318 SK8317と重複し、SK8317に壊される土坑。同じく室町時代の土師器が多量に出土した。出土した土器からSK8317との間に大きな時間差は考えにくい。

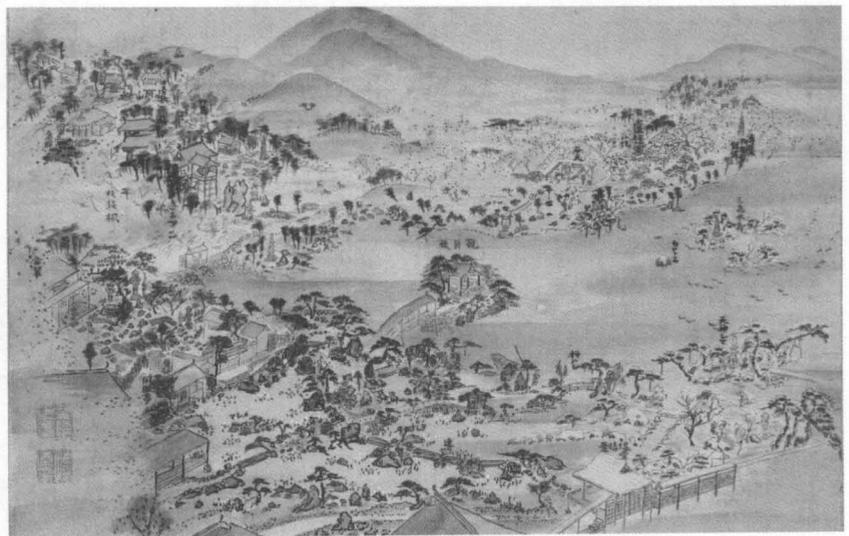


図129 「大乘院四季真景図」(興福寺蔵)

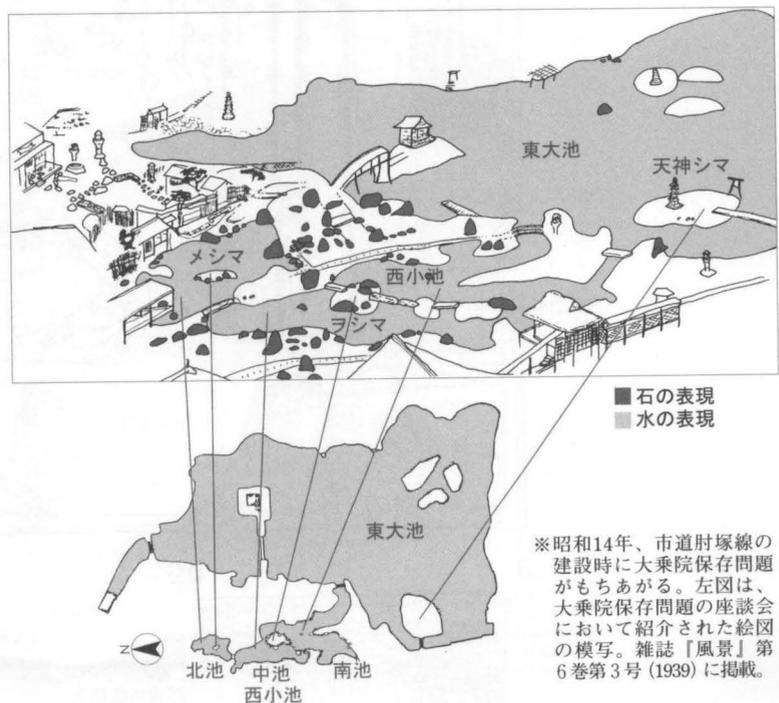


図130 池の名称と『真景図』との対照

SX8319 SK8317、SK8318の下で検出した落込み。掘形の一部を検出しただけであるが、極端に深く、井戸である可能性が高い。

SB8320 焼土面SX8316を覆う整地土の上面で、同規模の柱穴を多数検出した。これらの中から、一連と思われる4基をSB8320とした。これ以外の重複する柱穴は、柵などの施設の可能性もある。掘形からは近世の土器が出土しており、遺構を掘りきったところで焼土面を確認している。

SG8321 西小池の北池。東西9m、南北14mの範囲を検出した。池の中央で行った東西方向の断割調査によって、地山を削り込んで造成されていることが判明した。

地山は、直径10cm前後の礫からなる礫層の上に、暗青灰色の粘土が堆積しており、礫層は池中央のメシマSX8322以西で低くなる。北池SG8321は、この粘土層を削り込んでつくられている。西半は礫層が低く、池底を比較的深く掘り下げており、池底面は暗青灰色粘土である。東半では礫層が高く、粘土層を掘り下げると、すぐに礫層に到達したのであろう。さらに礫層を掘り下げることはせず、そのまま池底として利用したために、水深が10~20cmと浅く、礫敷の様相を呈していたと思われる。埋立土から石盤、硯、木製の看板といった近代にくだる資料が出土しており、明治時代になっても開口していたことが明らかとなった。

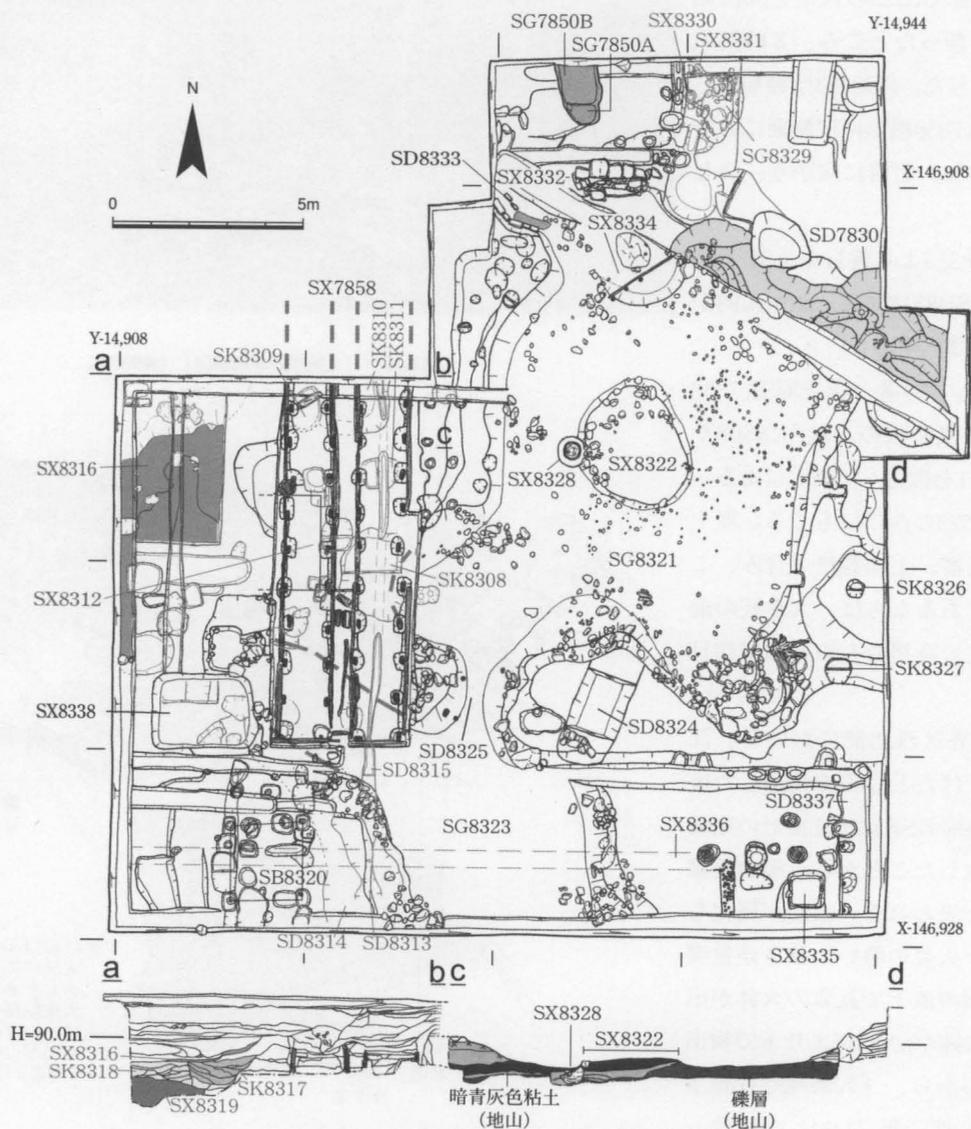


図131 第336次調査遺構平面図・断面図 1:200

SX8322 北池中央の島。『真景図』に「メシマ」と記されている。別に「ヲシマ」と記された島もあり、「女（雌）島」「男（雄）島」の字をあてるのであろう。直径は2.5m程の大きさで、地山の暗青灰色粘土を削り残すかたちで造成されている。護岸の貼石が一部残る。残存高で周囲から20cmほどの高まりしか残っていないが、『真景図』では景石や植栽が描かれている。

SX8328 メシマSX8322西側の埋甕遺構。室町時代頃の常滑産と思われる大甕を用いる。魚寄せか水性植物を植えていたのであろう。甕の据付掘形から室町時代の土師器が出土している。

SG8323 中池の北部である。地山の暗青灰色粘土を削り込んで造成されている。東西両岸には、まばらに護岸石が残る。池の堆積土、埋立土からは近世の土師器、陶磁器、瓦が出土した。明治時代以降にくだる遺物は出土していないことから、明治時代初頭の大乗院の廃院にともなう時期に埋め立てられたと思われる。

SD8324 北池SG8321と中池SG8323をつなぐ水路。この水路は埋め立てられた後、池護岸の貼石が施されていることから、SD8325に先行すると思われる。埋土から出土した遺物が少量であるため、水路が付け替えられた時期については不明。

SD8325 『真景図』に描かれた水路と思われる。同図では橋が架けられているが、橋脚の明確な痕跡は残っていない。埋土からは近代の遺物も出土しており、埋土の南北方向の土層断面から、まず中池SG8323とともに大半が埋め立てられ、その後、北側の一部は北池SG8321とともに埋め立てられたことが判明した。

SK8326・SK8327 北池SG8321の東側、淡黄色整地土の上で検出した浅い土坑。昭和初期に残された資料（藤田祥光著『大乗院』）には、大乗院の廃院に際し景石や庭木を売却しようとした記録があり、これらの穴は景石などを抜きとった痕跡の可能性もある。同様の穴はSG8321の北西でも検出している。

SD7830 第318次調査において検出され、「枯流れ」と判断された素掘りの蛇行溝。南肩は近代以降の土管掘形に壊されているが、北池SG8321の北側中央付近で終わる。また、埋土から近世の土師器が出土したことから、近世になって埋め立てられたと考えられる。

SG8329 漆喰製の池SG7850や階段状石組SX8332の検

出面を断ち割ったところで検出した石敷きの小池。北側には磚敷きの導水部らしきものを持ち、埋甕遺構SX8330がつくられている。

SX8330 SG8329にともなう埋甕遺構。甕は信楽産と思われる小型の甕で、時期は近世。茶褐色の釉が内外面に施され、肩部の4ヵ所に黒釉がかけられている。

SX8331 SG8329の下層で検出した土器埋設遺構。掘形を掘って土師器羽釜を据えている。時期は室町時代末～近世初頭。調査区の北端にあり、部分的な確認であるため、遺構の性格についての詳細は不明。

SG7850A・B 第318次調査において検出された漆喰製の池の南部分。底と壁は黄土色の漆喰でつくられている。上下2層があり（A・B）、南半の底面は南上がりの斜面をなす。池水の出口を考えるうえで重要な南端部分は削平され残っていなかった。江戸時代の漆喰製池は、熊本県人吉城跡の城郭遺跡や、東京都加賀藩前田家大聖寺藩邸においても報告されている（田中哲雄『発掘された庭園』日本の美術 第429号 至文堂 2002）。

SX8332 直径10cm前後の礫の上に20～50cmの切石を並べてつくった三段の階段状の石組。北池SG8321の北汀に接し、人が降りるための階段とも考えられるが、層位的には漆喰製池SG7850と同じ面を掘り込んで築成されており併存すると思われることから、SG7850から溢れた水をSG8321に落とす滝であった可能性もある。切石の間からは江戸時代の土師器、西側石の抜き取り穴からは室町時代の瓦が出土した。

SD8333 長さ40cmほどの長方形の切石を両側に並べた溝。溝底はSG7850同様、黄土色の漆喰でつくられている。北区の北方には、小規模な庭をもつ数寄屋建築群が想定されており、そこからの水を北池SG8321に流していたと思われる。

SX8334 SD8333などから流入する水を堰とめて浄化する浄水施設。一番下の堰板が1枚残っていた。埋土から江戸時代の土師器がまとも出土している。

SX8335 黄土色の漆喰製の便所と思われる。すぐ側に桶が据えられており、同様の桶は調査区西側でも検出している。黄土色の漆喰は「黄漆喰」と呼ばれ、江戸時代から明治時代にかけて使われていたらしい。これらは江戸時代の遺構検出面より上層で検出しており、明治時代、飛鳥小学校の時期の便所であった可能性が高い。

SX8336 円礫を帯状に敷いた上に幅10cmほどのコンクリートがのる建物基礎。調査区南端で、東西方向に検出した。羽子板ボルトなどの建築部材や工法から、大正時代頃の施設に関わるものと思われる。

SD8337 調査区南端から北へ4m程の位置で検出した東西溝。東端でL字状に南に折れて調査区東南隅にぬける。同じ位置に重なって数基の杭がうたれている。西側では、重なる位置に土管が埋設されていた。この溝の北側で急激に高くなることと、土管の年代などから明治時代以降、数度にわたって作り替えられた区画施設に関係する遺構の可能性が高い。

SK8338 埋土は多量に廃油を含む長方形の土坑。近現代のもので、土坑底面は地山に達している。この地山上面で土坑などの下層遺構を検出した。

SX7858 東西に並ぶ幅1.3m前後の防空壕を、2基検出した。南北の長さは、今回の調査で南端から13mを検出し、北側の第318次調査で一部を確認していることから、少なくとも25mの奥行を持つことが判明した。地面に箱形の掘形を掘り、内壁寄りに柱を立て、壁と柱との間に横板材を落とし込む構造のものである。元奈良ホテル従業員の方からの聞き取り調査により、ホテル従業員用の防空壕であったことが判明した。

SX7845 昭和30年代まであったテニスコート。第318次調査でも検出されている。現地表面の10cm程下で、ほぼ調査区東半を覆う範囲で検出した。防空壕SX7858を覆うことから、奈良ホテルが米軍に接収されている時期に造成されたものであろう。(神野 恵)

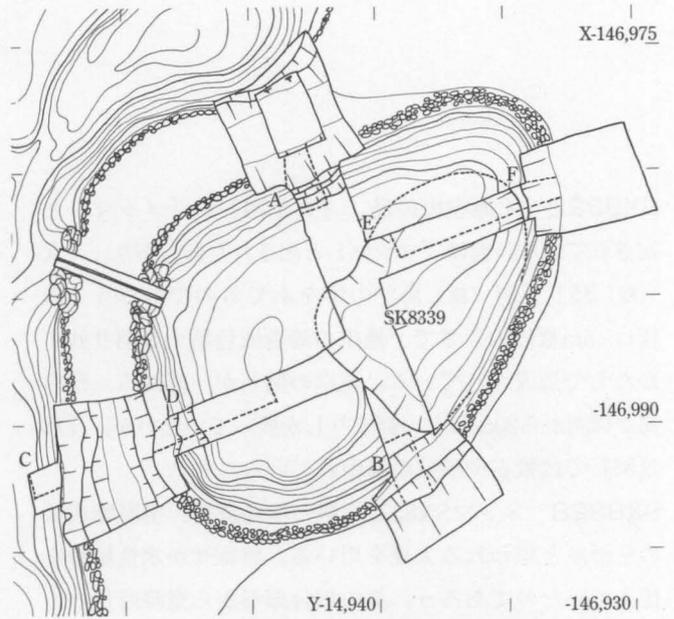


図132 南区(天神島)遺構平面図 1:300

南区

天神島 東大池南西の小島は、『真景図』(興福寺蔵)には「天神シマ」との記入があり、島の上には数本の松とともに重層の石塔が描かれている。長径20m、短径14mの卵型の平面形で、東大池の島の中では最も大きい。島の高さは北側の池の底から測ると2.5mある。

調査は島の上から汀線にかけて、十字形のトレンチを設定して行った(図132)。地表を覆っていた薄い表土の下は旧地表面であり、本来、現在とほとんど同じ形状の島であったことが知られる。その下の20cmほどの盛土層Aの下に、島の東半部の大半におよぶ深さ40~50cmの土坑SK8339がある。長径は10m近くあり、埋土は軟質で、近世の瓦や陶磁器片を含んでいる。この土坑は地山面の上に築成された盛土層Bから掘り込まれているが、場所によっては土坑の底面に地山が露出している。この盛土層Bには、少量であるが近世の陶磁器片が含まれている。

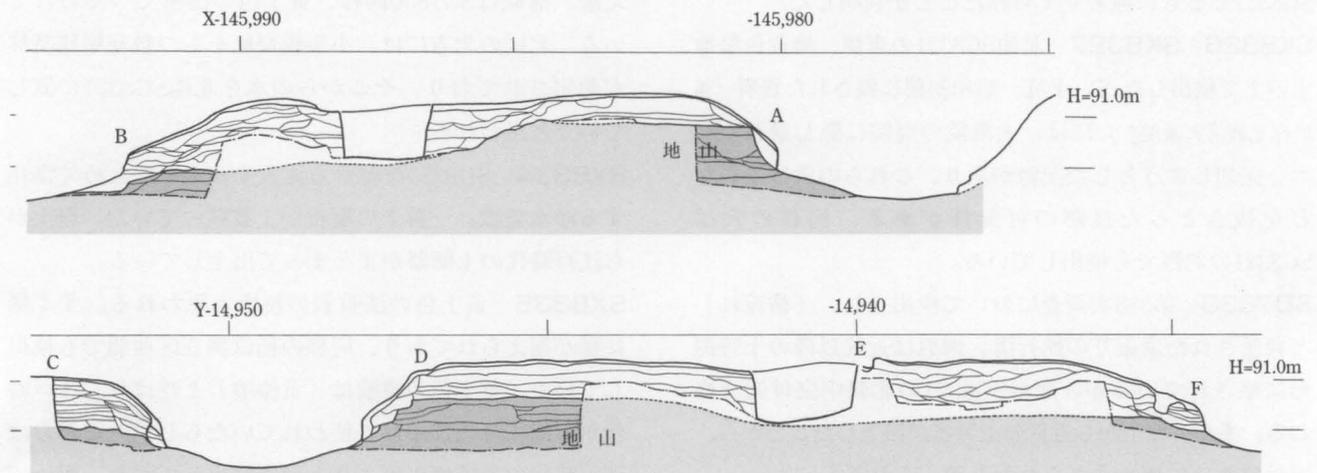


図133 第336次調査南区(天神島)土層断面図 1:150

地山面を確認するために、各所で深く掘り下げたところ、島の北側と西側では地山面が高く、南側と東側では低くなっていることが明らかになった(図133)。島の北側の池底からの高さでいうと、地山面は北側で140cm、西側で125cm、南側で50cmであった。一方、島の西方の東大池西岸部分での掘り下げ調査では、地山面は池底から60cmの高さであり、その上に1mほどの盛り土がなされている。こうしたことから考えると、天神島周辺の本来の地形は南北に通る低い尾根状であり、島の北側と西側を堀状に掘削して島部分を削り残した、地山削り出しによる築成であったことがわかる。

現在、東大池には3ヵ所に中島(群)があるが、今回の調査で、すべて発掘調査が行われたことになる(図128)。興味深いことに、それぞれ築成の状況は異なっている。池東南の三つ小島は、地山面直上に近世の土器を含んだ砂礫層、腐食土層が堆積し、その上に厚く盛土を施して島を造っている。築成年代は江戸時代前半。池北部の中島は、奈良時代以前の堆積層をベースにして、その上に平安時代の土層、中世の土層を盛り上げることで島を形成している。それに対して、今回調査した南西中島(天神島)は、基本的に地山削り出しによっており、その上に盛土をほどこすことによって、島の形状を整えている。東大池西岸でこの数年間すすめられている調査では、地山の上に整地土層が厚く盛土されている状況が目を引くが、場所によってはおびただしい量の中世の土器片を含むという特徴がある。しかし、天神島では狭い調査範囲ではあるものの、中世に属する遺物は皆無であった。即断はできないが、天神島の造成が近世期にあったことを示唆するものであろう。(井上和人)

3 出土遺物

瓦磚類

今回の調査で出土した瓦磚類は、表19のとおり。北区出土のものがほとんどを占める。興福寺305(興福寺出土軒瓦の整理番号、以下同じ)、興福寺919は鎌倉時代、興福寺861は中世、興福寺285は近世初頭、興福寺882は近世後半、興福寺280・282・283はいずれも近世の瓦と考えた(図135)。

表19 第336次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦	
型式	点数	型式	点数
奈良型式不明	1	中世巴	9
平安	1	近世巴	27
獣面文	1	中近世巴	1
興福寺305	1	中世	3
興福寺280	23	近世	11
興福寺282	17	菊丸	5
興福寺283	28	小型菊丸	40
興福寺285	12	軒棧瓦	3
軒丸瓦計	183	軒平瓦計	47

道具瓦他			
型式	点数	型式	点数
鬼瓦	5	隅切平瓦	1
面戸瓦	7	刻印付平瓦	1
甍斗瓦	11	へら書平瓦	3
袈瓦(刻印付)	1	近代レンガ(刻印付)	6
鯨	1	獅子口	1
鳥袈	3	用途不明	7

	丸瓦	平瓦	磚他
重量	157.9kg	649.3kg	14.4kg
点数	977	3930	22

注 興福寺の軒瓦番号は整理番号で、今後変更の可能性がある。

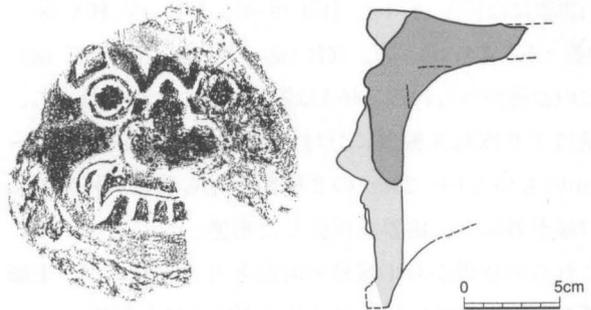


図134 第336次調査出土獣面文軒丸瓦 1:4
(第308次調査出土の同范品と合成)

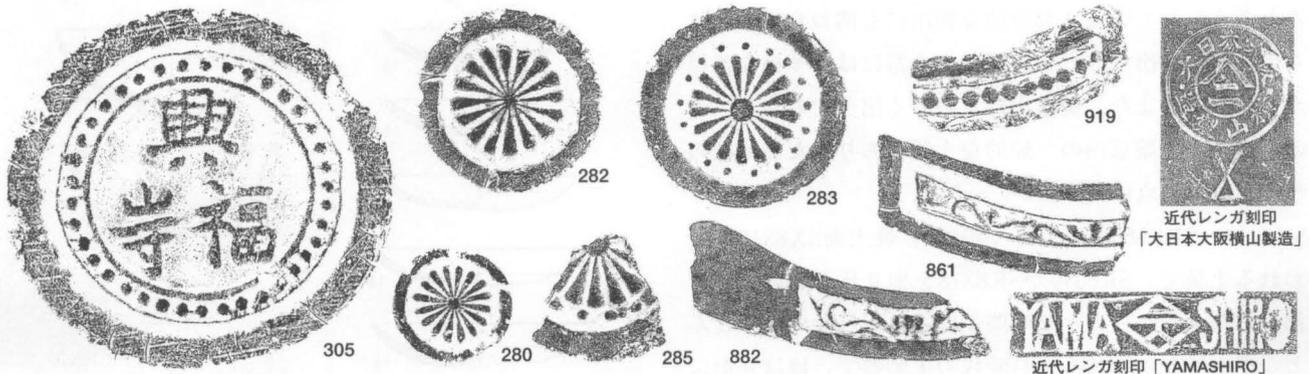


図135 第336次調査出土瓦磚類 1:4

北区西南辺から出土した獣面文軒丸瓦(図134)は、第308次調査の興福寺中金堂院回廊出土品と同範(『年報2000-Ⅲ』)。今回の出土で2例目となる。

この他、近代の焼却炉壁用と見られるレンガの中に、「大日本大阪横山製造」「YAMASHIRO」の刻印をもつものがある(図135)。また、遺構の時期に関わる資料として、北池SG8321埋土上層から近世後半の小型菊丸瓦、同下層から近世初頭の小型菊丸瓦、中池SG8323最下層埋土から近世後半の軒平瓦、石敷小池SG8329埋土から近世の軒丸瓦が出土している。それぞれの池の埋没年代を知る手がかりとなろう。(清野孝之)

土器・陶磁器

SK8308・SK8310・SK8311出土土器(図137) 各土坑間での接合関係は確認されなかったが、類似した様相を示すため、一括して報告する。

土師器には杯A(20~26)、杯C(19)、皿A(36)、皿C(34)、椀C(27~29)、鉢B(30)、壺B(37)、壺蓋(35)、甕A(39~41)、甕C(38)といった器種がみられる。杯A、皿Aには、いずれも一段放射暗文が施されている。杯Aは底部をけずるもの(23~25)が目立つ。皿Cは灯火器として用いられた痕跡がある。

須恵器には杯A(9~14)、杯B(2~7)、杯E(15)杯X(8)、杯B蓋(1)、皿A(16~18)、皿B(32)、皿B蓋(31)、壺E(33)などの器種がみられる。杯Aは器高の低いものが目立ち、法量により概ね3種類に分けられる。杯Bは口径が14~16cmのものと19~20cmの2種類が見られる。杯X(8)は口縁が外反し、磁器を模倣した形態。

これらの特徴から平城Ⅲの時期と考えられるが、土師器杯Aの底部を削るものが目立つ点は注目される。

この時期、大乘院の地は元興寺域内に取り込まれていると考えられている。部分的な検出にも関わらず、これらの土坑から出土した奈良時代の土器には、多様な器種が存在する。また、製塩土器も数多く出土するなど、この土器群が平城京内の一般的な土器のありかたと同様の様相を呈する点は興味深い。

SK8317・SK8318出土土器(図136) 焼土面SX8316に覆われる土坑で、SK8317がSK8318を掘り込んでいるが、出土した土器から大きな時間差は読み取れない。ほとんどが赤土器といわれる室町時代の土師器で、ほぼ完形に近い土師器皿が多数出土した。他方、その他の土器につ

いては、白土器の小片が数点混じるのみである。皿は口径8cm前後、器高1.5cm前後の比較的小型のものと、口径10~11cm前後、器高2~2.5cm前後の大型のものがある。器壁も比較的厚いものと薄いものに分かれる。小型の土師器は、底部をおしあげるへソ皿になるもの(1)が目立つ。また、類例の少ないものとして、厚手で手づくねの壺(8)も1点出土している。

『大乘院寺社雑事記』には、長禄元年(1457)から永正3年(1506)にかけて、土器座やその製品に関する記載があり、大乘院経営の一環として土器が作られていたことが記されている。本調査区の約20m西で行われた第278次調査においても、土坑などから同時期の赤土器、白土器が大量に出土している。今回、赤土器が出土した土坑は、焼土層SX8316に覆われており、この火災跡を宝徳3年(1451)の記載にあてはめるならば、これらの土器は、まさに大乘院土器座の手による可能性が高く、この時期の南都の土器編年を考える上で、一つの定点を示す資料となりうる。

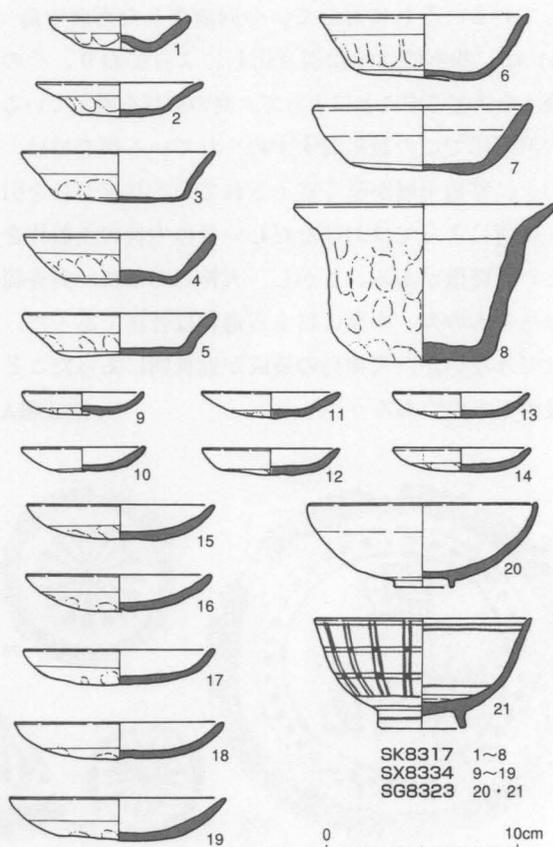
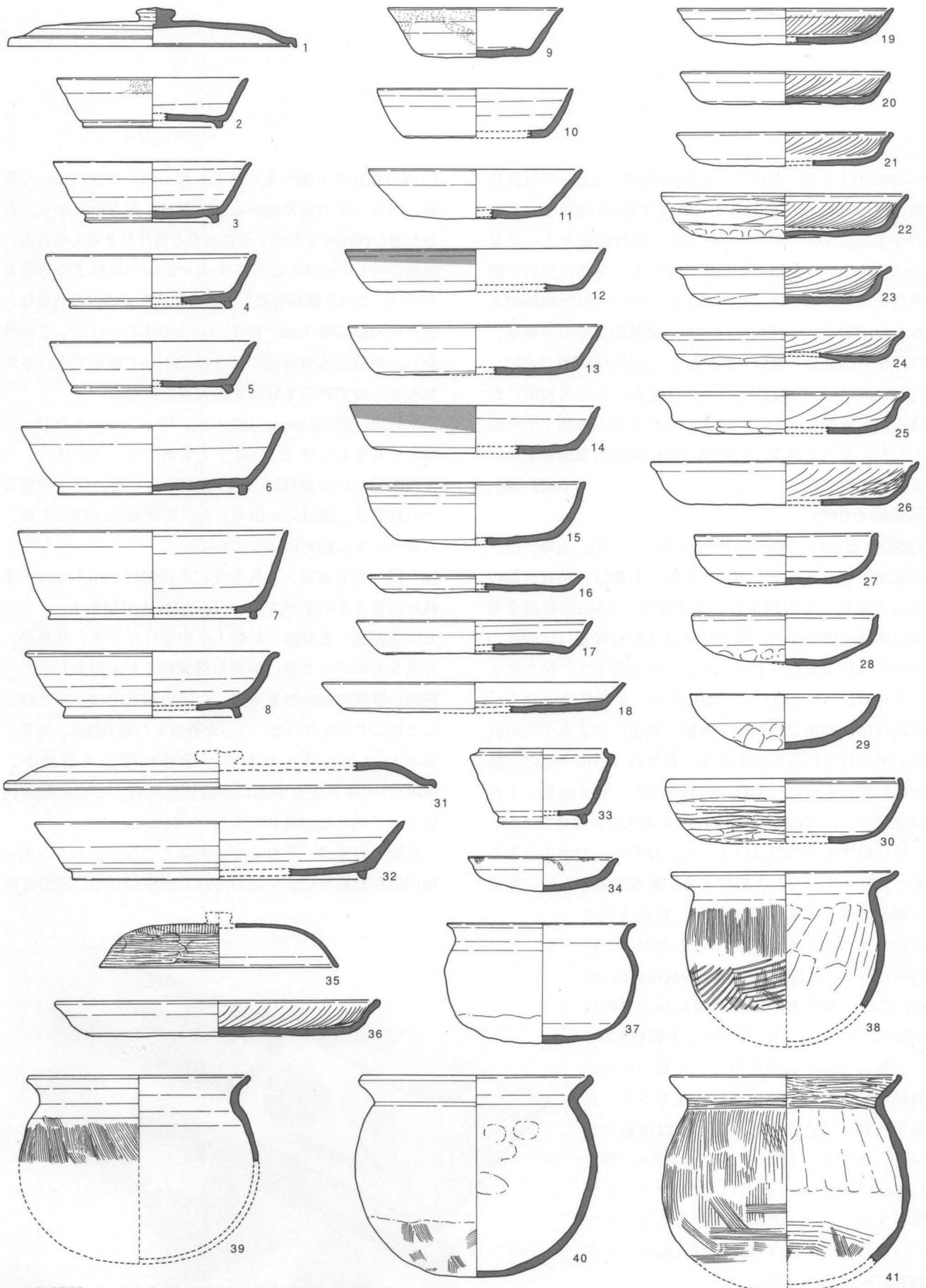


図136 第336次調査出土土器(室町~江戸時代) 1:4



SK8308 1・4・5・7・16・19・21・24・25・30・33・34・36・38・39
 SK8310 2・3・6・8・10・13・15・17・18・22・23・27・29・31・32・35・40
 SK8311 9・14・20・26・37・41

0 10 20cm

図137 第336次調査出土土器(奈良時代) 1:4

SG8323出土土器 (図136) 北池SG8321に先立って近代初頭に埋め立てられたと考えられる中池SG8323と、北池の浄水施設SX8334の埋土からは、比較的まとまった量の江戸時代の土師器皿が出土している。非常に硬質で淡褐色を呈し、なかには灯火器として用いられた痕跡のあるものがある。口径10~11.5cmの比較的大型の一群と、口径6~7.5cmの小型の一群があり、法量の規格性は高い。北池SG8321と中池SG8323からは近世から近代初頭にかけての陶磁器も出土している。これら池の堆積土から出土した近世の土師器、陶磁器には圧倒的に食器類が多いことが特徴である。(神野 恵)

石製品その他

石製品・瓦製品 西小池の埋立土から、石盤、石筆、硯、瓦転用円盤、基石などが出土した。石盤は、粘板岩製のものと瓦製のものがある。前者は厚さ2.5mmで縁辺を垂直に切断・研磨する。後者は厚さ4mmで縁辺には両面から幅2mm程の面取りをおこない、角を落とす。接合によって判明した板面は、短辺が17.3cm、長辺が18cm以上。表面には、線刻で、野線や方眼、名前に加え人や鳥の戯画が刻まれているものがある。石筆は3点出土した。断面はいずれもややつぶれた円形を呈し、径6mm程。1点は完形で長さ7.7cm。一端をペンシル状に尖らせている。

硯は破片も含め21点出土した。舟形のもの1点あるが、他はいずれも長方硯である。粘板岩系のものに加えて流紋岩系のものがあること、丘に溝状の窪みをもつものが複数あることなどの特徴がある。水路SD8325出土の硯の裏面(硯陰)には、覆手と呼ばれる隅丸長方形の浅い削りがあり、そこに「高嶋石」と線刻する。

「高嶋石」は、硯の産地として知られた滋賀県高島郡一帯で生産された硯をさす。瓦転用円盤は2点出土した。1点は灰褐色を呈し、わずかに楕円形で長径4.4cm、厚さ1.3cm。片面にカタカナで「ビンチャン」と墨書する。もう1点は燻瓦を打ち欠いてつくったもので、径5cm、厚さ1.8cm。いずれもSG8321埋立土出土。

木製品 SG8321の埋立土から石盤の枠木、木札、下駄、桶、箸、浮きなどが出土した。石盤の枠木は、長さ27.5cm、幅2cm、厚さ

1.1cmの板材の下隅を丸く落としたもの。片面には、「新調 四月」等の墨書がある。スギ材。現存資料から、石盤を囲む四辺のうちの下辺にあたる横枠材と考えられる。両端から1.1cmのところから1cm×6mmの貫通する方孔をもうけ、これを縦枠を組むための柄穴とする。上辺には、柄と柄の間に幅3mm、長さ23.4cmの溝をつける。この溝から、石盤自体の長辺の長さは23.4cmと推定でき、B5判あるいは半紙の半分ほどの大きさになる。

木札は、長さ6.2cm、幅2.1cm、厚さ5mmの小板で、一端に小孔をもうけ「□年生」と墨書する。スギ材。

金属製品 SG8321埋土、新盛土から、釘、鋸、煙管などの鉄製品、銅製品が出土した。防空壕SX7858からは、刀装具である鉾が出土している。

銭貨 寛永通宝、文久永宝、半銭銅貨が出土した。半銭は明治6年制定のもの。SG8321埋土上層出土。

ガラス製品・その他 新盛土を中心にインク、化粧品、目薬などのガラス壺、陶製の機械栓などが出土した。

飛鳥小学校にかかわる遺物 今回の調査では、現在ほとんど目にする機会がなくなった石盤と石盤の枠木、石筆、あるいは硯といった教育と学習に関わる遺物が、SG8321の埋立土を中心に多数出土した。2点の転用円盤も、子供たちの遊具であろう(図138)。

石盤と石筆は、それまでの和紙と毛筆にかわり、明治期に低年齢児童に広く用いられた書写用具で、石盤は粘



図138 飛鳥小学校に関わる遺物

板岩などの薄い板を半紙大あるいは半紙半分の大きさに切り、木の枠をつけたもの。石筆は蠟石を細く分割して筆状に加工したものである。

元治元年（1864）に最初に輸入された石盤は、学制発布の年である明治5年（1872）に文部省が出した「小学教則」では、すでに授業における使用法の規定も見え、その普及の様子をうかがうことができる。明治7～9年頃には国産化もなされるが、高価であったため、紙製、木製、石粉による合成、あるいは瓦製といった代用石盤が次々に考案された。今回出土した瓦製品がこうした代用石盤にあたろう。石盤と石筆は、記録性や書くことのできる面積の乏しさ、使用時の騒音などの問題から、明治30年代後半以降利用が減少し、練習帳と鉛筆にその座を明け渡した（佐藤秀夫「せきばん 石盤」『平凡社大百科事典』1985。添田晴雄「筆記具の変遷と学習」『近代日本の学校文化誌』思文閣出版 1992）。

西小池の出土遺物は、前述のように、飛鳥小学校という使用場所と使用時期が限定できる資料である。近代教育史の物的研究において、たとえば個々の教具・教材の細部の形制や材質、生産と供給の関係といった課題に対しては、こうした考古資料の寄与する点が少なからずあるものと考えられる。（次山 淳）

4 まとめ

江戸時代における西小池の形状 今回の調査では、『真景図』などに基づいて想定していた位置に、西小池の北池SG8321全体と中池SG8323の北半部を検出した。『真景図』では手前側の西小池が大きく描かれているため、実際の遺構をみると意外に小さい印象を受ける。だが、その平面形状が、図130に紹介した平面図にほぼ一致する点は注目される。1999年度の第310次調査で確認された南池東岸の位置もこの平面図とよく合致しており、未調査部分の西小池の形状についても、おおむね推測することが可能になった。

池の造成時期 池の造成時期を考えるうえで重要な手がかりを得ることができた。(1)中池SG8323の西岸は焼土面SX8316よりも新しい。(2)メシマ西側の埋甕遺構SX8328の甕は室町時代頃のものと思われ、据付けの掘形からは室町時代の土師器片が2点ほど出土している。この甕が作られた時期と、池に埋設された時期に大きな時間幅を

想定せず、中池と北池の造成を同時と考えるなら、西小池の造成は宝徳3年（1451）の火災後、室町時代の中と考えることができる。

この点について、各遺構の標高から考えてみたい。室町時代の焼土面と考えられるSX8316の標高は約89.5m。第310次調査で検出された南池SG7651、および今回の調査で検出した北池SG8321と中池SG8323の想定汀線は、いずれも約90m。北池SG8321と中池SG8323の池底は最も深いところでも89.5m程である。つまり、推定される水位から考えても、焼土面SX8316と北池SG8321、中池SG8323が併存する可能性は低い。したがって、焼土面上に整地土を積み上げたのちに池を造成したという想定が、いっそう蓋然性をおびてくる。

『大乘院寺社雑事記』との対照 西小池の北池、中池の造成ないし改修が、宝徳3年の火災より後であるならば、『大乘院寺社雑事記』に記載されているように、尋尊僧正が庭師善阿弥に依頼した一連の仕事である可能性もでてくる。この点については、なお十分な検討が必要であるが、北池の掘削にあたり、地山の礫層をそのまま池底敷に利用するなど、状況に応じた手法が看取され、庭園史にとっても資料的価値は大きい。

また、大乘院庭園の調査では、室町時代の赤土器、白土器と呼ばれる土師器が大量に出土している。特に本調査区の西で実施した第278次調査では、狭い面積ながら膨大な量の赤土器、白土器が出土している。今回の調査区西端からその西側にかけて、この時期の土師器が大量に捨てられている可能性があり、『大乘院寺社雑事記』に出てくる土器座との関わりや、この時期の建物配置を考えるうえで重要な知見を得ることができた。

下層遺構の存在 北区の西半では、奈良時代あるいは平安時代に属する遺構の存在が明らかになった。大乘院がこの地に移される養和元年（1181）以前は、ここは元興寺の寺域内にあり、11世紀半ばには堂塔を伴った禅定院が営まれたことが史料にあらわれる。また、元興寺中樞伽藍からは北方にやや距離を置いたこの周辺に、奈良時代の遺物を多くともなう遺構群が存在することは、平城京内の大規模寺院のあり方を探究するうえで重要な手がかりとみなすことができよう。大乘院庭園の前身となる庭園遺構の有無の追求も含めて、今後、近世以前の遺構の調査の進展に期するところも大きい。（神野 恵）